

〔小学校〕

学習評価についての基本的な考え方（算数科）

那覇教育事務所

毎時間で全ての児童に対して、3つの観点全てについて評価のための情報を収集する必要はない。単元の目標を分析して、各時間のねらいにふさわしい1～2観点到評価項目を精選する。

1. 「知識・技能」の評価

（1）「知識・技能」の評価規準

小学校学習指導要領の算数科の「内容のまとめり」で育成を目指す資質・能力「知識及び技能」に該当する指導事項について、育成したい資質・能力「知識・技能」に照らして、「小学校学習指導要領解説算数編」などにおいて示された内容をもとに表現を揃え、その文末を「～している」「～できる」として、評価規準を作成する。

（2）評価の視点

①1時間の授業の中のどの場面（評価場面）で、どんな児童の姿が見られれば、「おおむね満足できる」状況と評価するのか、また、その評価資料をどんな方法（評価方法）で収集するのかを計画しておくことが重要である。

（3）評価の実際・工夫

①児童の活動の様子やノート等の記述内容、ペーパーテストによる方法等が考えられる。

②算数科における知識は単元を通して繰り返し使う中で定着し、理解が深まり、また技能も繰り返し使うことで習熟し、生きて働く確かなものになると考えられるため、総括の資料にするために記録に残す評価の機会を単元末に設定する。ただし、単元末のみの評価とするのではなく、毎時間の机間指導やノートの記述内容、適用問題も交えながら児童の学習状況を把握し、特に「努力を要する」状況と考えられる児童には確実に習得できるように、単元を通して指導していくことが重要である。

2. 「思考・判断・表現」の評価

（1）「思考・判断・表現」の評価規準

小学校学習指導要領の算数科の「内容のまとめり」で育成を目指す資質・能力「思考力、判断力、表現力等」に該当する指導事項について、育成したい資質・能力「思考力・判断力・表現力等」に照らして、「小学校学習指導要領解説算数編」などにおいて示された内容をもとに具体化し、その文末を「～している」として、評価規準を作成する。

（2）評価の視点

①問題解決の際の児童の発言や記述内容等が、学習内容ごとに「おおむね満足できる」状況であるのかなどを、それぞれ判断していくことが重要である。

（3）評価の実際・工夫

①「思考・判断・表現」については、授業中の問題発見や解決の過程において児童が発揮するものであるので、授業中の発言や話し合いなどの活動の様子と、個人解決時の問題解決の様子、適用問題や活用問題の解決の様子や学習感想などの振り返りといったノート等の記述内容から評価の情報を収集することが望ましい。

また、新たな問いに気づいたり、発展的・統合的に見て数学的なよさに気づいたりすることは、児童の発言といった形で表出されることが多い。このような「思考・判断・表現」において「十分満足できる」と判断できる状況は、日々の問題解決における指導者の観察記録に頼ることとなる。そこで、「思考・判断・表現」については、単元末だけではなく、単元の評価規準の評価内容ごとに、授業中の問題発見や解決の過程を行う時間において、主として総括の資料にするために記録に残す評価の機会を設定する。

3. 「主体的に学習に取り組む態度」の評価

（1）「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準

当該学年目標の（3）を踏まえて作成した「主体的に学習に取り組む態度」の「観念の趣旨」をもとに、指導事項を踏まえて、その文末を「～している」として評価規準を作成している。そのため抽象度をあげた書き方で示されている。

実際に単元において評価するに当たって、指導し評価する事項が明確になるように、具体的な書き方で表現を

揃えたり、時に追加したりする必要がある。「小学校学習指導要領解説算数編」などにおいて示された内容をもとに、具体的な学習活動や指導事項を踏まえて具体化し、その文末を「～している」として、評価規準を作成する。

(2) 評価の視点

①「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、特に学習活動における状況の把握が大切であるので、チェックリストや座席表などを用意し、評価資料として児童の反応を書き込めるようにしておくことなどが考えられる。学習活動の状況を簡潔に記録しておくことで、単元末の評価に活用していくことができる。

(3) 評価の実際・工夫

①「主体的に学習に取り組む態度」は、問題発見や解決の過程において、既習事項を活用したり、話し合いの最中に他者の意見を参考にしたりする姿等に表れたり、振り返ってよりよい表現や方法を考えたり、新たな場面を見いだしたり、日常生活の場面において活用しようとしたりする姿等に表れるため、活動の様子やノート等の記述内容から評価の情報を収集することが考えられる。

②「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、単元を通して働かせた数学的な見方・考え方が豊かになる算数科の特性から単元前半から後半にかけて高まることが考えられる。そこで、単元の終わりに、総括の資料にするために記録に残す評価の機会を設定する。

4. 単元の評価規準作成 (例示)

1 ねらいに応じた評価項目の精選と、記録に残す評価の機会の明確化

○指導に生かす評価の代表的な機会については「・」をつけたり、記録に残す評価の機会には「○」を付けたりして各々の視点の評価の機会を明確にする。

2 作成手順

事例「あまりのあるわり算」

1 単元目標

- (1) 割り切れない場合の除法の意味や余りについて理解し、それが用いられる場合について知り、その計算が確実にできる。(知識及び技能)
- (2) 割り切れない場合の除法の計算の意味や計算の仕方を考えたり、割り切れない場合の除法を日常生活に生かしたりすることができる。(思考力・判断力・表現力等)
- (3) 割り切れない場合の除法に進んで関わり、数学的に表現・処理したことを振り返り、数理的な処理のよさに気づき生活や学習に活用しようとしている。(学びに向かう力、人間性等)

※主語は、「児童」となる。評価規準の表記も含めて児童の姿が見えるように表記する。

【「具体的な内容のまとめりごとの評価規準」(除法)をもとに「あまりのあるわり算」の単元評価規準を作成する】

2 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> ① 包含除や等分除など、除法の意味について理解し、それが用いられる場合について知っている。 ② 除数と商が共に一位数である除法の計算が確実にできる。 ③ 割り切れない場合に余りを出すことや、余りは除数より小さいことを知っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ① 除法が用いられる場面の数量の関係を考え、具体物や図などを用いて表現している。 ② 余りのある除法の余りについて、日常生活の場面に応じて考えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ① 除法が用いられる場面の数量の関係を考え、具体物や図などを用いて表現しようとしている。 ② 除法の場面を身の回りから見付け、除法を用いようとしている。(「わり算探し」など)

3 指導と評価の計画 ※各時間のねらいにふさわしい評価規準を「単元の評価規準」から設定する。

時間	ねらい・学習活動	評価規準・評価方法		
		知・技	思・判・表	態度
1 ・ 2 3	余りがある場合でも除法を用いてよいことや答えの見つけ方を具体物や図などを用いて考える。 余りがある場合の除法の式の表し方や、余りなど用語の意味を知る。 余りと除数の関係を理解する。 余りと除数の関係を調べる。	・知① ノート分析 ・知③ ノート分析	・思① 活動観察 ノート分析	・態① 活動観察 ノート分析
4	等分除の場面についても余りがある場合の除法が適用できるかを考える。 等分除の場面で、答えの見つけ方を考える。		○思① 活動観察 ノート分析	
5	割り切れない場合の除法計算について、答えの確かめ方を知る。	・知② ノート分析		
6 ・ 7	日常生活の場面に当てはめたときに、商と余りをどのように解釈すればよいかを考える。 商を+1する場合やしない場合について、それぞれ考える。		・思② 活動観察 ノート分析	○態① ノート分析
8	学習内容の定着を確認し、理解を確実にする。(章末問題)	・知①②③ ノート分析		
9	学習内容の定着を確認する。(評価テスト)	○知①②③ ペーパーテスト	○思② ノート分析	
10	学習内容を適用して除法の問題を考えたり、話し合ったりする。			○態② ノート分析

※指導と評価の計画を作成する際の留意点

- 単元の評価規準については、別添「算数科具体的なまとめりごとの評価規準(例)」を参照する。
- 評価方法 (活動観察、ノート分析、ペーパーテスト等)
- ねらい・学習活動・評価規準・評価方法を明記する。